

フォスフォレッスセンス

太宰治

青空文庫

「まあ、綺麗きれい。。お前、そのまま王子様のところへでもお嫁よめに行け
るよ。」

「あら、お母さん、それは夢よ。」

この二人の会話に於いて、一体どちらが夢想家で、どちらが現
実家なのであろうか。

母は、言葉の上ではまるで夢想家のようなあんばいだし、娘は
その夢想を破るような所いわゆる謂現実家みたいなことを言つてゐる。

しかし、母は実際のところは、その夢の可能性をみじんも信じ
ていないからこそ、そのような夢想をやすやすと言えるのであつ
て、かえつてそれをあわてて否定する娘のほうが、もしや、とい

う期待を持つて、そうしてあわてて否定しているもののように思われる。

世の現実家、夢想家の區別も、このように錯雜しているものの如くに、此頃、私には思われてならぬ。

私は、この世の中に生きている。しかし、それは、私のほんの一部分でしか無いのだ。同様に、君も、またあのひとも、その大部分を、他のひとには全然わからぬところで生きているに違いないのだ。

私だけの場合を、例にとつて言うならば、私は、この社会と、全く切りはなされた別の世界で生きている数時間を持つている。それは、私の眠っている間の数時間である。私はこの地球の、ど

こにも絶対に無い美しい風景を、たしかにこの眼で見て、しかもなお忘れずに記憶している。

私は私のこの肉体を^{もつ}以て、その風景の中に遊んだ。記憶は、それは、現実であろうと、また眠りのうちの夢であろうと、その鮮やかさに変りが無いならば、私にとつて、同じような現実ではなかろうか。

私は、睡眠のあいだの夢に於いて、或^ある友人の、最も美しい言葉を聞いた。また、それに応ずる私の言葉も、最も自然の流露の感じのものであった。

また私は、眠りの中の夢に於いて、こがれる女人から、実は、というそのひとの本心を聞いた。そうして私は、眠りから覚めて

も、やはり、それを私の現実として信じているのである。

夢想家。

そのような、私のような人間は、夢想家と呼ばれ、あまいだらしない種族のものとして多くの人の嘲笑ちようしょうと軽蔑の的にされるようであるが、その笑っているひとに、しかし、笑っているそのお前も、私にとつては夢と同じさ、と言つたら、そのひとは、どんな顔をするであろうか。

私は、一日八時間ずつ眠つて夢の中で成長し、老いて来たのだ。つまり私は、所謂いわゆるこの世の現実で無い、別の世界の現実の中でも育つて来た男なのである。

私にはこの世の中の、どこにもいない親友がいる。しかもその

親友は生きている。また私には、この世のどこにもいない妻がいる。しかもその妻は、言葉も肉体も持つて、生きている。

私は眼が覚めて、顔を洗いながら、その妻の匂いを身近に感ずる事が出来る。そうして、夜寝る時には、またその妻に逢える楽しい期待を持つてゐるのである。

「しばらく逢わなかつたけど、どうしたの？」

「桜桃とうを取りに行つていたの。」

「冬でも桜桃があるの？」

「スイス。」

「そう。」

食慾も、またあの性慾とやらも、何も無い涼しい恋の会話が続

いて、夢で、以前に何度も見た事のある、しかし、地球の上には絶対に無い湖のほとりの青草原に私たち夫婦は寝ころぶ。

「くやしいでしようね。」

「馬鹿だ。みな馬鹿ばかりだ。」

私は涙を流す。

そのとき、眼が覚める。私は涙を流している。眠りの中の夢と、現実がつながっている。気持がそのまま、つながっている。だから、私にとつてこの世の中の現実は、眠りの中の夢の連続でもあり、また、眠りの中の夢は、そのまま私の現実でもあると考えている。

この世の中に於ける私の現実の生活ばかりを見て、私の全部を

了解することは、他の人たちには不可能であろう。と同時に、私もまた、ほかの人たちに就いて、何の理解するところも無いのである。

夢は、れいのフロイド先生のお説にしたがえば、この現実世界からすべて暗示を受けているものなのだそうであるが、しかしそれは、母と娘は同じものだという暴論のようにも私には思われる。そこには、つながりがありながら、また本質的な差異のある、別箇の世界が展開せられている筈はずである。

私の夢は現実とつながり、現実は夢とつながっているとはいうものの、その空気が、やはり全く違っている。夢の国で流した涙がこの現実につながり、やはり私は口惜くやしくて泣いているが、し

かし、考えてみると、あの国で流した涙のほうが、私にはずっと
本当の涙のような気がするのである。

たとえば、或る夜、こんなことがあつた。

いつも夢の中で現れる妻が、

「あなたは、正義ということをご存じ？」

と、からかうような口調では無く、私を信頼し切つて いるよ
うな口調で尋ねた。

私は、答えなかつた。

「あなたは、男らしさというものをご存じ？」

私は、答えなかつた。

「あなたは、清潔ということをご存じ？」

私は、答えなかつた。

「あなたは、愛ということをどこ存じ？」

私は、答えなかつた。

やはり、あの湖のほとりの草原に寝ころんでいたのであるが、

私は寝ころびながら涙を流した。

すると、鳥が一羽飛んで來た。その鳥は、蝙蝠こうもりに似ていたが、

メートル

片方の翼の長さだけでも三米さんまいちかく、そうして、その翼をすこしも動かさず、グライダのように音も無く私たちの上、二米くらい上を、すれすれに飛んで行つて、そのとき、鴉からすの鳴くような声でこう言つた。

「ここでは泣いてもよろしいが、あの世界では、そんなことで泣

くなよ。」

私は、それ以来、人間はこの現実の世界と、それから、もうひとつつの睡眠の中の夢の世界と、二つの世界に於いて生活しているものであつて、この二つの生活の体験の錯雜し、混迷しているところに、謂いわば全人生とでもいつたものがあるのではあるまいか、と考えるようになつた。

「さようなら。」

と現実の世界で別れる。

夢でまた逢う。

「さつきは、叔父おじが来ていて、済みませんでした。」

「もう、叔父さん、帰つたの？」

「あたしを、芝居しばいに連れて行くつて、きかないのよ。羽左衛門うざえもんと梅幸ばいこうの襲名しゆうめい披露ひろうで、こんどの羽左衛門は、前の羽左衛門よりも、もつと男振りがよくつて、すつきりして、可愛くつて、そういうして、声がよくつて、芸もまるで前の羽左衛門とは較べものにならないくらいうまいんですつて。」

「そうだつてね。僕は白状するけれども、前の羽左衛門が大好きでね、あのひとが死んで、もう、歌舞伎かぶきを見る気もしなくなつた程ほどなのだ。けれども、あれよりも、もつと美しい羽左衛門が出たとなりや、僕だつて、見に行きたいが、あなたはどうして行かなかつたの？」

「ジイドが来たの。」

「ジイプが？」

「あたし、花束いただを戴いたの。」

「百合ゆりでしよう。」

「いいえ。」

そうして私のわからない、フォスフォなんとかいう長つたらし
いむずかしい花の名を言つた。私は、自分の語学の貧しさを恥か
しく思つた。

「アメリカにも、招魂祭があるのかしら。」

とそのひとが言つた。

「招魂祭の花なの？」

そのひとは、それに答えず、

「墓場の無い人つて、かなしいわね。あたし、やせたわ。」

「どんな言葉がいいのかしら。お好きな言葉をなんでも言つてあげるよ。」

「別れる、と言つて。」

「別れて、また逢うの？」

「あの世で。」

とそのひとは言つたが私は、ああこれは現実なのだ、現実の世界で別れても、また、このひととはあの睡眠の夢の世界で逢うことが出来るのだから、なんでも無い、と頗るゆつたりした気分でいた。

そうして朝、眼が覚めて、わかれたのが現実の世界の出来事で、

逢つたのが夢の世界の出来事、そうしてまた別れたのがやはり夢の世界の出来事、もうどつちでも同じことのような気持ちで、床の中**で**ぼんやりして いたら、かねて、きようが約束の締切日ということになつていた或る雑誌の原稿を取りに、若い編輯者へんしゅうしゃがやつて來た。

私にはまだ一枚も書けていない。許して下さい、来月号か、その次あたりに書かせて下さい、と願つたけれども、それは聞き容れられなかつた。ぜひ今日中に五枚でも十枚でも書いてくれなければ困る、と言う。私も、いやそれは困る、と言う。

「いかがでしよう。これから、一緒にお酒を飲んで、あなたのおりつしやることを私が書きます。」

酒の誘惑には私は極度にもろかつた。

二人で出て、かねて私の馴染なじみのおでんやに行き、亭主に二階の静かな部屋を貸してもらうように頼んだが、あいにくその日は六月の一日で、その日から料理屋が全部、自肅休業とかをする事になつてゐるのだそうで、どうもお座敷を貸すのはまずい、という亭主の返辞で、それならば、君のところに前から手持のお酒で売れ残つたものがないか、それをゆずつて貰もらいたい、と私は言い、亭主から日本酒を一升売つてもらつて、私たち二人は何のあてどもなく、一升いつしちょう瓶びんをさげて初夏の郊外を歩き廻つた。

ふと、思いついて、あのひとのお宅のほうへ歩いて行つた。私はこれまで、そのお宅の前を歩いてみた事はしばしばあつたが、

まだそのお宅へはいつてみたことは無かつたのだ。ほかのところで逢つてばかりいたのである。

そのお宅は、かなり広く、家族も少いし、あいているお部屋の一つ位はあるにきまつてゐる。

「僕の家は、あんな具合に子供が大勢で、うるさくて、とても何も出来やしないし、それに来客があつたら困るし、ちよつと知合いの家がありますから、そこへ行つて仕事をやつてみましよう。」

こんな用事でも口実にしなければ、もう、あのひとつと逢うことが出来ないかも知れぬ。

私は勇気を出して、そのお宅の呼鈴を押した。女中が出て來た。あのひとは、いらつしやらないという。

「お芝居ですか？」

「ええ。」

私は嘘うそをついた。いや、やつぱり、嘘ではない。私にとつて、現実の事を言つたのだ。

「それならすぐお帰りになります。先刻、こちらの叔父さんに逢いまして、芝居に引っ張り出したけど、途中で逃げてしまつたとおつしやつて、笑つておられましたから。」

女中は、私をちかしい者のように思つたらしく、笑つて、どうぞと言つた。

私たちは、そのひとの居間にとおされた。正面の壁に、若い男の写真が飾られていた。墓場の無い人つて、哀しいわね。私はと

つさに了解した。

「ご主人ですね？」

「ええ、まだ南方からお帰りになりませんの。もう七年、ご消息が無いんですって。」

そのひとに、そんなご主人があるとは、実は、私もそのときはじめて知つたのである。

「綺麗な花だなあ。」

と若い編輯者はその写真の下の机に飾られてある一束の花を見て、そう言つた。

「なんて花でしょう。」

と彼にたずねられて、私はすらすらと答えた。

〔Phosphorescence〕

青空文庫情報

底本：「太宰治全集9」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年5月30日第1刷発行

1998（平成10）年6月15日第5刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月発行

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

2000年1月25日公開

2005年11月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

フォスフォレッスセンス

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>